ブラジルに於ける戦前日本人社会の社会制度と文化目標の矛盾

― 勝負抗争の社会的背景 ―

（サンパウロ大学大学院）三田　千代子

1. はじめに

世界第2次大線直後，サンパウロ州の日本人社会に「理解困難な現象」がおこった。祖国日本が負けたことを信じられぬグループと負けたことを認めた人々のグループとの対立である。この現象は，数日間で終ったのではなく，1950年代になっても継続していた。

この日本人社会の抗争についての過去の業績をみると，年代記的に扱ったものとして，高木の『狂信』と藤崎の『陛下は生きておられた！』がある。(注1) 代表的な秘密結社（臣道連盟）については，Mario Botelho de Miranda と Alexandre Fernandes の業績がある。(注2) 両者とも日本人社会の組織（「日本人会」「青年会」等）を分析し，特に，「青年会」が臣道連盟と結びついていたことを推論している。前者は，臣道連盟の組織や活動を述べ，これらをいわゆる狂信者によるものとして扱っているが，一方，後者はMiranda の片寄った視点を脱しょうとしたもので，ブラジルにおける日本人の経済的地位や同化の程度を他のヨーロッパ移民と比較することにより，日本人移住者の役割を社会学的視点で論じている。さらに，視点を広げると，移民の同化過程の問題として，社会学的又は，文化人類学的に扱っている論文をあげることができる。Saito Willems は，ヴァルガスの国家主義政策に対するカルチャー・ショックとしてこの現象を説明している。(注3) Izumi と Maeyama の論文は，日本人移住者の社会心理的側面からアプローチしている。(注4)日本人社会の社会文化的視点から年代記的に論じているものとして，Kumasaka Saito 論文がある。(注5) これは，最初のWillems Saito 論文で扱えなかった勝負抗争のポジィティブな結果と

してブラジル社会への日本人の急速な同化をあげていることは，評価されるべき指摘である。

本稿の試みは，勝負抗争という日本人の社会的逸脱行為を生じさせた日本人社会の社会構造を考察することである。従って，社会構造を経済，人口分布，価値システムの側面から分析し，当時の日本人移住者の文化目標との矛盾を指摘することによって，この勝負抗争について新しい視点から解釈を行う。

2. 事件の概略

当時のブラジルの日本人の社会構造を分析する前に，まず，この勝負抗争の概略について記する。

日本人社会の混乱は，主として3つの現象から成っている。日本語による印刷物の発行が禁じられていたため，情報がきわめて歪めて伝達されやすい状態にあった。従って，デマが横行する結果を迎いた。Izumiの調査によれば，ほとんどの日本人が戦争の終了を人伝によって知り，わずか3％の日本人が，ブラジルの新聞や雑誌によって知ったという結果が報告されている。(注6) このため日本の降伏と敗戦という事実が伝えられた時，日本軍によって連合国の艦隊が日本の近海に沈没させられたとか，連合軍が無条件降伏を受諾したというデマが飛んだのである。さらに，他の多くのデマが，サンパウロ州奥地の日本人植民地に広がったのである。この様な流言飛語によって，日本人の多くは，祖国日本の敗戦という事実を信じることができず，祖国の敗戦を信じた人々を「裏切者」として葬ろうとした一連の暗殺テロ事件となり，日本人社会は勝組と負組に分かれ，相互に憎しみを育てていったのである。

もう2つの現象は，「勝国日本」への帰国（又は，日本の「南方占領地域への再移住」―いずれも幻でしかなかったが―）を希望する日本人を相手にした帰国詐欺と価値のなくなった旧日本円の闇売買である。これらの事件を推進したのは，日本の戦勝を信じた人々である。Izumi の調査によれば，終戦後1週間して，日本の戦勝を信していた者は当時のサンパウロ州及びパラナー州の日本人移住者の85.5％を占めていた。逆に，日本の敗戦を信じていたものは，14.5％となっている。(注7) 後者2つの現象は，当時の日本人移住者の将来に対する不安（この不安については後述する），それ故に，帰国を希望するという

勝組の人々の心理を利用した詐欺事件であり，第１の現象の２次的現象といえよう。従って，ここでは，第１のテロ事件の経緯についてさらに述べることが必要であろう。

戦後の日本人社会の抗争の発芽は，１９４３年にすでにみられた。それは，薄荷栽培と養蚕の日本人農家が焼打ちに会うという事件であった。これらの産業は，敵国であるアメリカの軍事物資に利用されるものであるからという理由で，これらの日本人農家は「大日本帝国の裏切者」と，一部の日本人に考えられ焼打ちの対象となったのである。このテログループは「天誅組」と呼ばれていた。(注8) こうした行動を支援したものの中に，後の臣道連盟の幹部となったものが含まれており，日本人の秘密結社が組織されていったのである。秘密結社は，約２０社生まれたが，この中で，一番規模が大きく，かつ最も組織化されていたのが臣道連盟である。

日本の敗戦のニュースによって，ブラジルの日本人社会は流言飛語の混乱を迎え，多くの日本人は，帰国熱にうかされた。しかし，一方では，日本の事実を知るわずかの日本人が，この日本人社会の混乱を鎮めるため，認識運動を展開したのであった。終戦後，半年以上して始まった一連の暗殺テロ事件を推進したのは，上に述べた秘密結社であった。はじめての暗殺事件は，１９４６年３月７日，バストスでおこった。被害者は，バストス産業組合専務理事であった。１９４７年１月７日の事件（サンパウロのスウェーデン領事館日本人権益部森田芳一の義兄が義弟と間違われて殺害される）を最後にテロ事件は終る。(注9) しかし，日本人の対立が終ったのではなく，潜在化し，その後，日本総領事暗殺未遂事件等が，１９５０年頃までに発生している。(注10) この日本人社会のテロ事件は，約３０件数えることができる。暗殺された者１６名，重傷者１１名，軽傷者数名で，ブラジル人も被害者となって事件に巻き込まれている。暗殺犯人のほとんどは，逮捕され，臣道連盟の幹部とともに，合計１７７名が大統領令により国外追放処分を受けたが，その後，人身保護法によって漸次釈放されていった。(注11)

テロ事件の半数は，日本人植民地が多く建設されていたパウリスタ鉄道延長線のMarilia, Pompeia, Bastos, Tupa の各ムニシーピオで発生した。同様に日本人が多く居住していたノロエステ線沿線のムニシーピオでも事件の約４分の１が発生している。被害者のほとんどは，市街地に居住する者か，あるい

は，各植民地の指導的立場にあった者である。これら被害者は，戦争末期の日本の戦況については，大本営発表の偽りのニュースと同時に，ブラジルで発表されるニュースからも知る機会を有しており，また，これらを判断する能力を有していた者であり，日本の敗戦が，信じられぬ事ではなく，ありうるべき事として受け入れることができたのである。一方，犯人達は，いずれもサンパウロ州奥地の日本人植民地の農村出身の１６～３０才の青年であった。(注12)

では，これらテロ事件を推進した臣道連盟の会員数はどの位あったのであろうか。

パウリスタ新聞は「加盟ないし，シンパ的立場にあったのは，（当時の）の日系人の９割」と推定している。(注13)臣道連盟の発表では，登録された会員は，約１３万人である。(注14)しかし，この会員数は，ある１人の会員が登録するとその家族全員を会員とする数え方によって発表された数字である。当時の平均家族数は，5.9人であるから，(注15)臣道連盟の会員は，約２万人ということになる。この数値は，当時の日本人の人口の１割にあたる。(注16)

これら会員の地理的分布をみると次の様になる。パウリスタ鉄道延長線の地域では，会員の３８.４％，ノロエステ線では，３４.２％が分布し，各ムニシピオ別では，パウリスタ鉄道延長線のMariliaが一番多くの会員数を占めており，次いで，Pompéia，Tupã（いずれもパウリスタ鉄道延長線のムニシピオ）である。この３ムニシピオで，全会員の４分の１を占めている（表１参照）。ノロエステとパウリスタ延長線の当時の日系人の人口は：各々４５,６３７人，２２,６９５人である。(注17) 従って，両線の人口分布比は，約１：２である。各々の会員数は，パウリスタ延長線で7,３９１人，ノロエステでは，6,５８３人と推定され，人口に占める会員の割合は，パウリスタ延長線で３２.６％，ノロエステ線では，１４.４％となる。パウリスタ延長線は，ノロエスタ線に比して，２倍以上の臣道連盟会員を有する地域であったといえる。(注18)

次に，臣道連盟の綱領及び『在伯同胞指導方針要綱』をみてみると，「日本精神の実現」の普及というのがこの秘密結社の公式の態度といえよう（巻末付録参照）。「日本精神」とは何を意味するのであろうか。それは，日本軍部が唱えた典型的な当時の日本の価値システムを意味している。ブラジルに於いて日本の価値システムを展開することは，ブラジル社会への同化を否定することを意味している。戦前の日本人移住者のいずれ日本に帰るつもりでいた態度と

この臣道連盟の主張とは密接な結びつきがあったことは容易に理解される。直接にしろ間接的にしろ臣道連盟が行なったテロ，暗殺という社会的逸脱行為は当時の日本人移住者の1割のものの異常な行為ではなく，ほとんどの日本人が直面していた心理的混乱を表現しているものである。なぜなら，先にあげたように9割の日系人が何らかの形で臣道連盟を支持し，8割以上のものが日本の敗戦を信じていなかったのである。

そこで，「常規を逸した行動は，社会学的にみれば，文化的に規定された志望とこの志望を実現するための，社会的に構造づけられた通路とが結びついていない徴候だといえよう」というマートンの仮設に従って，当時の日本人社会を次に考察してみる。(注19)

3. アノミーをひきおこす社会構造

マートンは，文化目標と制度的規範の関係によって，集団を3つに類型する。すなわち，第1類型―手続の選択範囲が制度的規範よりも，むしろ技術的規範だけに左右されている集団。極端な場合は，至上の目標に達する見込みのある手続ならばどんなものでもすべて許容する。第2類型―元来手段的なものと考えられていた活動が変じて，それ以上の目的をもたない自足的な慣行と化しているような儀礼的集団。文化の許容する行動の選択範囲が著しく制限されているので，新しい諸条件に適応する基礎がほとんどない。第3類型―中間型。文化的目標の強調と制度的慣行の強調とが大体においてバランスを保っている社会。統合的で比較的安定した社会。(注20)

社会学的にみると，諸個人の主たる環境には，一方に文化構造があり，他方には，社会構造があると考えることができる。文化構造は，特定の社会又は，集団の成員に共通な行動を支配する規範的価値の組織体である。そして，社会的構造は，社会又は，集団の成員が，多様な仕方でかかわりあう社会関係の組織体であるとマートンは捉らえている。この場合，アノミーは，文化構造の崩壊と考えられるのであって，特に，文化的な規範や目標と集団成員がこれらに応じて行動する社会構造上の能力との間に食い違いがある場合に生じてくるのである。　従って，第1類型に属する集団では，文化構造と社会構造とが不完全に統合されているので，文化目標を達成する場合，アノミーを容易にひきお

こすことになるのである。この様な集団では，犯罪，非行，自殺等のアノミー的傾向に反応する逸脱行動が多く生ずるのである。

我々が問題としている臣道連盟を中心とする一連のテロ事件は，理由はどうあれ，犯罪である。マートンによれば，これらの犯罪と生じさせる社会構造上の問題が，当時の日本人社会の中に存在していたことになる。つまり，第1類型の集団は，目的が異常に強調され，その割には制度的手続が強調されないような社会であり，従って，人々は技術的手段だけを配慮して行動するようになる。技術的にもっとも有効な手続は，文化的に正当なものであろうとなかろうと，一般に，制度的に規定された行為よりも望ましいものとなってしまうのである。

従って，当時のブラジルの日本人社会には，一連のテロ行為を生じさせる社会制度と文化目標の矛盾が存在していたことが推測されるのである。次に，この制度と目的との矛盾について具体的に検討する。

4. 経済的背景

第1項で述べた様に，勝組のテロ事件の主な中心地となったのは，パウリスタ鉄道延長線及びノロエステ線のムニシピオの都市及び農村地域である。ここでは，大戦前のパウリスタ延長線を中心とした日本人移住者の経済的背景を考察する。

ブラジルのコーヒー経済は，１９２９年の世界経済恐慌以来危機に直面し，コーヒー生産の過剰時代に入った。そこで日本系人農家では，１９３２年に綿作が始まり，１９３７～４２年の綿作全盛時代を迎える。１９４７年頃より綿作は，後退し，それに代って近郊作物農家が出現してくる。以後日系農家の多くは，急速に近郊作物農家に移っていくのである（表２参照）。

綿作に於ける日系人の農業上の地位は，表３に示してある様に，自作農（Pequeno sitiante）は約３割で，大多数が土地を持たない農民であった。コーヒー栽培の様に，植付けて５～６年もしなければ収益につながらない作物とは違い，１年で収入に結びつく綿作は，土地を持たない農民にとって魅力ある作物であったし，又，地力の消耗の激しい作物であるため借地した方が都合がよかったともいえる。さらに，コーヒーと同様に，国際市場の変動が直ちに

末端の生産者に波及し，市価の浮動の振幅の大きい綿作りは，高値と豊作に恵まれれば，一挙に資金を蓄積できる可能性があった。しかし，逆に凶作，安値となれば，債務に苦しむこととなった。綿作借地農の投機性があったとはいえ，１９３３年をピークとして移住してきたいわゆる「新移民」は早く財産をつくるために，当時景気のよかった綿作に従事した理由がここにあった。

現存する資料で大戦勃発（１９３９年）直前のものは，輪湖の調査報告がある。(注22) 主にノロエステ線，パウリスタ延長沿いに在住する日系人家族，11,500 家族，総人口 68,332 人を対象に１９３８年，経済及び文化的側面を調査報告したものである。当時の日系人総数約２０万人のうち約３４％がこの地域に在住していた。

この報告書によると，渡伯時は，約９５％がコロノ（コーヒー農園の契約労働者）としてサンパウロ州各地に入植したが，この時点で，独立農となっている家族は，４7.4％，借地又はコロノ４4.3％，残り8.3％が農業以外の職業についている。(注23) 主な作物は，コーヒー，米，綿で，これらの収入１００とすれば，うち７５％は，土地の購入代金及び，賃金，借地料にあてられていた。(注24) 地主となっているものでも，土地の購入代金の返済に追われていたものがほとんどであった。

コーヒーと綿の収入が全収入に占める割合は次表４に示してある。この地域の日系人農家の収入の半分以上が綿作によっていたことがわかる。

表４：コーヒー及び綿花の収入(注25)

	コーヒー	綿	総収入
単位コントス	30,437	63,274	113,616
%	26.8	55.7	100

出典：輪湖俊午郎，『パウルー管内の邦人』
ティエテ移住地（サンパウロ）：個人出版，１９３９年，２１及び次ページ。

次に，臣道連盟の会員の経済状況をさらに詳しく考察するために，表１の会員分布をもう一度とりあげる。表１のムニシピオを会員保有順位に従って，A（７～１０％）B（４～５％）C（２～３％）D（１％以下）という様にグル

ープからサンプルとして以下の4ムニシピオを選び出した。(注26)

	ムニシピオ	会員保有割合	所在地域
Aグループ*	Marilia	10.4%	パウリスタ延長線
Bグループ	Mirandópolis	4.9	ノロエステ線
Cグループ	Lins	3.0	ノロエステ線
Dグループ	Baurú	0.4	ノロエステ線

＊Aグループに分類されるムニシピオはこの他にPompéia とTupãがあるのみ。いずれもパウリスタ延長線沿に存在（巻末サンパウロ州略地図参照）。

各ムニシピオと各鉄道線沿線の経済状況を表5及び表6にまとめた。これらの表から，次の様に各地を特徴づけることができる。

まず，パウリスタ延長線地域とノロエステ線地域を比較する。都市生活者の人口に占める割合は両地域とも同じであるが，「地主」の割合と「借地及びコロノ」の割合が，まったく入れ換っている（パウリスタ延長線では「地主」，37.2%，「借地及びコロノ」51.9%，ノロエステ線では「地主」53.2%「借地及びコロノ」36.0%）。主要農産物については，両線とも綿作がコーヒー生産を上回ってはいるが，各実数をみると，パウリスタ延長線では，約80%が綿作で，コーヒーが約10%を占め，残る10%が，「米及びその他の収入」となっている。一方，ノロエステ線では，綿作が約40%，コーヒーも40%弱，残り約20%が「米及びその他の収入」ということになる。パウリスタ延長線では，極端に綿作による経済生活を展開し，都市生活者の収入が人口の割には延びていないことが考えられる。一方，ノロエステ線では（「その他の収入」20%のうち米作による収入がどの程度の割合で占めていたかが不明ではあるが），パウリスタ延長線との比較では，都市生活者の収入が好ましい状況にあったと想像することができる。従って，ノロエステ線では，奥地型農業から近郊型農業へ，又は都市化への傾向が，比較的順調に移行していたことが予想される。又，「地主」の割合が多いことからも，経済的に比較的安定していたと考えられる。

次に，A・B・C・Dの4ムニシピオを比較すると，「地主」，「借地及びコロノ」の割合もコーヒー及び綿作による収入の割合も予想されるような変化を示していないことに気づく。Aでは，「借地及びコロノ」が「地主」を上回り，B・Cでは，反対に，「地主」の割合が増大し，「借地及びコロノ」を上

回っている。又，綿作による収入は，A→B→Cへと減じている。しかし，Dでは，各数値の関係は，むしろA型に近い傾向を示している。そこで，両線の家族数と総収入を１００として，各ムニシピオの家族数と収入が，それぞれに占める割合をみると，Aでは，パウリスタ延長線に占める家族数の割合，（５2.6％）が，同線に占める総収入の割合（５0.6％）を上回っている。ノロエステ線地域で，最も多い会員数をもつBでも，同様に家娘数の割合（8.6％）が，収入の割合（4.5％）を上回っている。ところが，C・Dのムニシピオでは，この関係が反対になり，収入の割合（Cは３8.1％，Dは１6.4％）が，家族数の割合（Cは１7.8％，Dは7.8％）を倍の数値で上回っている。特に，Dでは，綿作によりながらも，比較的恵まれた収益を得ていたといえる。

従って，（当然のことではあるが）綿作と臣道連盟が相関関係にあったのではなく，経済的に恵まれていたか否かということが問題となる。経済的にあまり恵まれずに，比較的都市化が進行していた地域で全員になるものが多かったといえる。

１９３７～４２年を頂点とした綿作りは，その後急激な下降線を辿る。この5年間に，養鶏が主要生産物の第1位に達し，１９４７～５２年には，第2位であった綿作を蔬菜作が上回るのである（図1参照）。日系農家が，急速に近郊型農業に移行していくのが１９３７～５２年の5年間である。つまり，上にとりあげた4ムニシピオの経済状況は綿作を中心とした奥地型農業から近郊型農業に移行する時期であり，同時に，この近郊型農業の出現を可能とする背景としての都市化が進行していた時期であったといえる。

4ムニシピオのうち，A・B・Cでは，都市化，又は，近郊型農業への移行が順調に進行していたのではなく，農村では借地農やコロノの非自作農が多く，経済的に恵まれていないために，そこに出現しつつあった都市化現象との間にギャップが生じていたことが考えられる。

以上述べた様な経済状況を背景として次に日本人社会及び日本人移住者の文化目標の変化について考察する。

5. 移住者の目標と植民地の崩壊

戦前の日本人移住者の大部分は，日本で農業に従事していた。元来，土地を

離れて生活が成り立たない農民が，なぜ母国の土地を離れて新大陸へ渡ったのであろうか。日本から出移民が多くなされた時期をみると，その背景には，常に日本の経済の病幣という状況があった。(注27) 彼等自身が自らを「棄民」と呼んだごとく，日本政府からみれば，移住政策は「口減らし政策」であった。ましてや，ほとんどの日本人移住者は，新大陸で新国家建設に自らが参加するということをまったく考えてもいなかったことである（しかし，皮肉なことに，日本移民70年の歴史を経て，日本人はブラジル国家建設に参加していたのである）。移住者の大部分は，短期間である程度の蓄財をして帰国するつもりでいた。1938年の調査では，日本人移住者の90％が帰国する意図をもっていた。(注28) 戦前の日本人移住者は，永住を目的として渡伯したのではなく，出稼地としてのブラジルに渡ったのである。コロノ移民としてなるべく早くお金をためて―6カ月後には―日本に送金をする心づもりであったが，ハワイ移民のように蓄財が短期間では不可能であることがわかり，多くの人たちは，たとえ小さな土地でもいいから，「地主」となって自作農となり，蓄財を果すことを希望した。そこで，日本人だけの開拓地をつくり，借地農から自作農への道を歩むのである。従って，日本人植民地では，まさに日本の村を移した生活を展開した。(注29) ブラジルの社会との接触はほとんど限られていた。また進んで，ブラジル社会に入る必要もなかったのである。いずれは日本に帰るのであるから。

ところが，移住者の最も安心していられる日本人のみの植民地（つまり日本の村落形態をとった植民地）の崩壊の兆しが，1932年頃から始まり，1935年以降になるとかなり目立ってくるのである。それは，サンパウロ州に於けるコーヒーの植付が，1932年から3ケ年間禁止されたために，北パラナーやサンパウロ市あるいはこの近郊，ソロカバナ鉄道線沿いの地域へ移動するものが増え，日本人の売りに出したロッテをブラジル人が購入したりして，植民地に日本人以外の住民が入ってき，日本人だけの閉鎖的集団を持続しえなくなってきたのである。特に，綿作が後退をはじめる1940年頃からパウリスタ延長線地域では，上記3地域への移動者が増加し，1948～58年には，前者2地域への移動が顕著となっている。(注30) つまり1938年頃から，パウリスタ延長線の日本人の移動は，農村から農村に向う動きと，農村から市街地へ向う動きがあったことになる。1938～42年の4年間のサンパウロ州日本人の移動傾向は，農村から農村への移動率が首位を占めているが，同時に，農村か

ら都市への移動率が急増し，次の１９４３～４７年の４年間には，農村から農村への移動率を上回っている（図Ⅱ参照）。

パウリスタ延長線地域における日本人植民地の崩壊に伴うブラジル社会との接触の増大は，日本人移住者のブラジル社会に対する態度（ブラジル社会との接触は必要最少限とする）に変化を与えることになった。同時に，子弟のブラジル人としての成長は，移住者の日本からたずさえてきた文化目標（蓄財をなして帰国する）の達成に不安を投げかけるものとなるのである。

6. 二世の成長と「新移民」

移民集団の成員は，二世の誕生と新来の移住者によって変化していくものである。

まず，日本人植民地の構成員としての二世について考察する。

１９３８年の調査によると，世代別人口分布は，３５％以上が，ブラジル生まれで，さらに「準二世」を加えると５５％となっていた。(注31)

二世の年令分布は，１９５８年の調査資料によると，１９４２年で，２０～３３才（１９０８～２２年生）が9,042人，０～１９才（１９２３～４２年生）が11,370人に達していた。二世の人口は，合計122,749人となり，当時の日系人の総人口は約２０万人であるから，過半数がブラジル生まれとなる。(注32) １９４２年で，二世の最高年令は３３才である。３３～１３才の年令層が，日本生まれとブラジル生まれの混合している年令層で，割合は，77.8％対22.2％となっている。１３才以下の年令層では，ブラジル生まれが絶対多数を占めるということになる。(注33) しかし，この調査には，戦後の移住者の数も入っているので，このことを考慮に入れれば，１９４２年当時は，１３～３３才の年令層のブラジル生まれの割合は，もっと大きくなると考えられる。さらに，生まれによらず，就学地別で考えれば，「準二世」に属する人が，ブラジル生まれに加わり，この年令層を構成する「二世」は，３割を下ることはなかったと考えられよう。

日本人移住者集団に於けるこれら二世の成長は，いかなる意味をもつであろうか。

二世のアイデンティティーについては，文化人類学や社会学で多様に議論さ

れる問題である。マージナルな人として，どちらの文化にも属することのできない人という悲観的見方がある。

ブラジルの日本人二世は，最初に家庭内で日本語を覚え，次に成長して，生活の場が拡大するとポルトガル語を覚える。そしてポルトガル語が，自分の言葉となる。日本語はむしろ忘れて行く。(注34)言葉の学習は同時に，各々の文化を学習させるものである。とすると，日本人の両親が家庭で教えることよりも，学校や社会で学習することによって二世のパーソナリティーを形成しているといえよう。従って彼等は，ある時期から，日本人としてよりもブラジル人としての価値体系を獲得していくのである。

１９３６年に，二世がブラジル人としてアィデンティティーを確立したことを象徴する事件がおきている。それは「菊花事件」といわれる。サンパウロ市で，ある日系二世大学生の「われわれ二世は菊花の国を尊敬することはできるが，愛することはできない」という意見が日本語に翻訳されて雑誌に発表された。(注36)「菊の花の国」とは父母の国日本のことである。彼等二世は，父母の国として日本を尊敬はするが，彼等の祖国は日本ではなくブラジルであることをブラジル人日系二世の立場から宣言したのである。彼等は，すでにブラジル人として成長していたのである。これを当時の日本人社会は「不敬事件」と考えた。日本の皇室に対する不敬であると……。

一世の移住者は，ブラジルで生まれ育っていく子弟が移民の子としてブラジル社会に同化していくことに，２側面に於いて心理的不安を感じた。ひとつは観念的レベルで，日本から携帯した文化的価値観がもぎとられることであり，もうひとつは，現実的レベルに於けるもので，帰国不可能となることであった。つまり，二世のブラジル人としての成長は，帰国して日本で生活する場合に，日本人として生活するのではなく，ブラジル人として生活することを意味したのである。

次に，移住者集団のもう１つの構成員である新来の移住者について考察してみよう。

日本人のブラジル移住史の中で，戦前移住の大きなピークとなったのは，世界恐慌により，日本経済が病弊し，特に，農村の貧困が激しかった１９３３年及び３４年の頃である。この時期を頂点として，１９２９～３５年まで約１０万人に及ぶ日本人がブラジルに移住している。戦前移民の７０％以上がこの時

期になされている。(注37) １９３４年の移民制限法によって，日本からの移住者は減少するのではあるが，この時期にブラジルに入国した「新移民」の数は，それまでの既存の日本人社会に大きな影響を与える力をもっていた。この時期の日本は，１９３１年に日本軍部により一方的に満州国建国宣言がされた様に，日本の国家主義が最も強化された時でもあった。そして，そのまま日本の軍部は，太平洋戦争に突入していったのである。

移民は母国の技術と文化を移住した国に携帯する役割をもつとすれば，これら「新移民」は，既存の日本人社会に日本の国家主義イデオロギーの宣伝マンでもあった。この日本の国家主義イデオロギーは，すでに出現しつつあった日本人植民地のブラジル社会への同化傾向を否定するものであった。また，ブラジルのヴァルガスによるEstado Novo 政策とも当然ながら対立するものであった。

ここで，ノロエステ線及びパウリスタ延長線地域の日本人家族を渡伯年別に調べてみると，過半数の家族が，１９２９年以降にブラジルに渡航している（表６参照）。特に，パウリスタ延長線地域では，１０家族のうち8.5家族が「新移民」の家族で占められていたのである。この地域に，「新移民」の大半は，借地農又はコロノとして入ってきたのである。１９３８年の調査によれば１９２９年以降に渡伯したもののうち，６０.９％が借地農又はコロノであり，これに対し，自作農は，２８.７％，都市生活者となっていたものは，１０.４％という割合となっていた。(注38)

従って，綿作という生産が不安定であったうえに，さらに農業上の地位も，借地又はコロノという経済的に利益の少ない地位にあった。このことは，彼等

表７：ノロエステ線及びパウリスタ延長線に於ける日本人家族数

地　域	家族総数	1929～38年に渡伯した家族数	%
ノロエステ線	7, 237	3, 784	52. 0
パウリスタ延長線	3, 697	2, 804	85. 4
計	10, 970	6, 089	55. 5

出典：輪湖，前掲書，２０ページから作表。

を他地域へ移動させることをより容易とさせ，日本人だけの閉鎖的集団の崩壊をより速めることとなった。

１９４０年頃の日本人移住者は，子弟のブラジル人としての成長（あるいはブラジルの日本人として，日本人の文化背景とは異なる文化システムを持っての成長），日本人植民地の崩壊という２つの現実に直面し，彼等の携えてきた目標（蓄財して帰国する。従って，ブラジル社会との接触は最少必要限度とする）の再検討が必要とされていたのである。さらにヴァルガス政権以後，顕著となったブラジル同化政策（移民制限法，外国語教育の禁止，外国語による印刷物発行禁止等）によって，移住者は母国日本及び子弟との文化的コミュニケーション手段が断たれた状態となった。潜在化していた日本人社会の文化目標とそれを達成するための制度との矛盾が，移住者に意識されることになったのである。

7. まとめ

文化目標と制度の矛盾をもった日本人社会を背景として，戦後の日本人社会の抗争は発生したのである。この矛盾を如何に解決するかが，日本人社会の直面していた問題だったのである。

緊張処理のプロセスとして人間の社会諸行動をみると，この矛盾に対して我々は如何なる適応行動をとり得るであろうか。マートンによると，ある社会のもう文化目標が実現できない社会制度がある場合，適応の行動様式は，どちらかを承認，又は拒否するかによって，次の４つの行動様式が考えられる。

個人の適応様式の類型(注39)

適応様式	文化目標	制度的手段
1. 革新	＋	－
2. 儀礼主義	－	＋
3. 逃避主義	－	－
4. 反抗	±	±

各記号の意味は：

(＋)―承認，(－)―拒否，(±)―その集団で支配的な価値の拒否と新しい価値の代替。

一連のテロ事件を推進した臣道連盟が目的としたのは，「日本精神の実現」と「日本への永住帰国」である。Willems Saito論文が指摘しているように前者は，すでに兆しをみせていた日本人社会のブラジル社会への同化を否定することを意味している言葉である。(注40)「日本精神の実現」は，子弟の日本語教育，「日本文化」の伝達（神道，武道，隣組精神）を具体的には意味していた。つまり子弟がブラジル人として成長することを否定したこの秘密結社の運動は反同化運動である。ところが，この文化目標を実現することは制度的に不可能であったことはすでに指摘した。そこで，文化目標を実現するために，制度的手段を拒否するか，あるいは，文化目標を放棄して，すでに出現しようとしている制度を認めるかという選択に迫まられることになった。そして，文化目標を放棄しない結果として，手段を選ばない類型１の逸脱行動が発生したのである。

移住者のもう一つの文化目標であった「日本への帰国」は，日本に帰ることによって，彼等の第１の文化目標は，制度的矛盾なく実現されることを意味している。つまり，これは，当時の移住者が心理的葛藤からのがれる手段であった。ブラジルで生活する限り，正当な手段では，常に目標に近づくことができず，又，内心の禁止によって不当な手段を用い得ることができないために生ずるものである。この葛藤からのがれるため，目標の達成が可能であると思われるところに逃避，すなわち日本に「帰国」するのである。ブラジルの社会にあって（たとえ，ブラジルの日本人社会においても），日本への帰国を考えることは，現実の矛盾から逃避するという類型３の行動様式である。

戦時中から兆しをみせたテロ事件，そしてこの事件に巻き込まれた日本人社会の混乱は，日本人社会の文化目標と制度の矛盾から生じた社会的逸脱行動であった。この制度を無視した逸脱行動によって，日本人社会はアノミー状態となり，戦後の多くの犯罪を生じさせたのである。終戦後，約１０年の月日をかけて，日本人社会は，文化目標に変更を加えることにより，安定した社会をつくり出したのである。すなわち，１９５２年に行われた調査によれば，永住の決心で渡航した者１１.１％，渡航当時は金を儲けて帰るつもりだったが，今は永住を決心した者５７.８％，今もまだ帰国するつもりの者１２.４％,残り18.6％は幼少時の渡航者又は，「二世」で不明となっている。(注41)すでに示した様に１９３８年の調査では，「帰国」するつもりの者は９０％に達していたが，こ

の戦後の調査では，「永住」組が約８７％に達している。従って，この日本人社会の抗争は，日本人移住者の価値体系の変化をもたらすための葛藤であった。制度にあった文化目標を獲得することによって日本人社会は安定したのである。

以上，いわゆる「勝負抗争」の社会的背景として，戦前の日本人社会の矛盾について述べた。社会構造に視点を置いたために，本稿では，「抗争」の経過や，臣道連盟の活動については最少限言及しただけとなった。又，用いた資料には各々時間の差があるため，本稿で指摘したことは今後，再検討されるべきである。サンパウロ人文科学研究所にて発表した折，出席者の方から，同じ経済状況にありながら臣道連盟会員を多く有しなかった地域との比較が必要であるとの有益な示唆をいただいた。この指摘をふまえて，今後さらに検討するつもりである。

１９７８年８月３１日

サンパウロ大学にて　三田　千代子

注

(1)　髙木俊明，『狂信』，朝日新聞社，１９７０年。藤崎康夫，『陛下は生きておられた／―「ブラジル勝組」の記録―』，新人物往来社，１９７４年。いずれもフィクション小説である。この現象を前者は，勝負両者から記録をとり，後者藤崎は，勝組の立場から取り扱っている。藤崎は，勝組の誕生を，日本の戦前の移住政策と軍国主義教育を原因として説明している。

(2)　Miranda, Mario Botelho de, Shindo Renmei — Teirorimso e Extersão, São Paulo : Saraiva, 1948.

Fernandes, Alexandre, A Verdade sôbre a Shindo Renmei, São Paulo : n・p・, 1949.

(3)　Willems, Emilio e Hiroshi Saito, "Shindo Renmei : Um Prohlema de Aculturasão, 'Sociologia, Vel. 1X, № 2 (1947) pp. 132 − 152

(4)　Izumi, Seiichi, "A Estrutura Psicológica de Colônia Japonesa no Brasil" H. Saito e T. Maeyama (eds), Assim-

ilação e Integrações dos Japoneses no Brasil, Petrópolis : Vozes, 1973, pp. 361－385 Maeyama, Takashi, "O Antepassado, o Imperador e o Imigpante : Religião e Identificaçoes de Grupo dos Japoneses no Brasil Rural (1908－1950), " H・Saito e T・Maegama (eds), Ibid., pp.414－447.

(5) Kumasaka, Y, e H. Saito, "Kachigumi : Uma Delusão Coletiva entre os Japoneses e sens Descendentes no Brasil," H. H. Saito e T. Maeyama (eds) op. cit., pp. 448－464.

(6) Izumi の調査では次の様に報告されている。戦争の終了を隣人及び友人によって知ったと答えた者，３1.６％。農業協同及び，その他の組織によって知った者，２4.1％。日本からの直接あるいは間接のラジオ放送によって知った者，２3.９％。たまたま近くの町に用事のために出て知った者，8.２％。当時，幼少であったのでわからないと答えた者，8.６％。ブラジルの新聞及び雑誌によって知った者，3.３％。(Izumi, S., op.cit. p.382)

(7) Izumi, S., op. cit., p. 363.

(8) パウリスタ新聞(編)，『コロニア戦後１０年史』，パウリスタ新聞社１９５６年，８～９ページ参照。

(9) パウリスタ新聞(編)，同書，１２～１７ページ参照。

(10) 日本人の対立の和解は，１９５４年，サンパウロ市建設４００年祭の記念行事として日本館建設が，そのシンボルとなった。この抗争の終結については，Kumasaka, Saito, 前掲論文を参照されたい。

(11) パウリスタ新聞(編)，前掲書，１２～１７ページ参照。

(12) Miranda, op. cit., p.75／86.

(13) パウリスタ新聞(編)，前掲書，９ページ引用。

(14) Miranda, op. cit., pp.63f.

(15) 輪湖俊午郎，『パウルー管内の邦人』，ティエテ移住地(サンパウロ)個人出版，１９３９年，１４ページ。但し，Mirandaは，平均家族数５人としているが，この数字の出典が示されていないので，ここでは，輪湖の数値を用いた(Miranda, op , cit., p.64.)。

(16) Miranda の計算によれば，会員数は，２万５千人である(Miranda, op.

cit., p.64.)

(17) 輪湖，前掲書，１４ページ参照。

(18) 但し，この総人口の調査は１９３８年になされ，臣道連盟会員数の調査は，１９４５年のものであるから，この間の，人口移動が考えられるのでこれらの数値には当然幅が考えられよう。

(19) Merton, Robert K., Social Theory and Social Structure, New York : Free Press, １９６５. p.134.（森東吾他訳『社会理論と社会構造』，みすず書房，１９７２年，１２４ページ。）

(20) Merton, Ibid., pp.133f.

(21) Merton, op.cit., p.162.

(22) 輪湖，前掲書。

(23) 輪湖，前掲書，１９ページ。但し，前掲表２，３とは分類が異っている。前表の「借地農」「分益農」「コロノ」を輪湖は「借地農又はコロノ」として区別せずに扱っている。

(24) 輪湖，前掲書，４６ページ。

(25) 輪湖は，各作物の収獲量のみ報告しているので，コーヒーは１８ミルレイス／コッコ，綿は１４ミルレイス／アローバとして計算した。表５も同様にした。

(26) これら４ムニシピオは，輪湖の資料に引用されているムニシピオと重なる様に選び出した。

(27) 三田千代子，『ブラジル日系人の対日イメージーコミュニケーションとイメージの変化』，上智大学イベロアメリカ研究所，１９７７年，８－９ページ。

(28) 輪湖，前掲書，１ページ。

(29) Maeyama, T. op.cit., pp. 420 − 425.

(30) ブラジル日系人実態調査委員会（編），『ブラジルの日本移民』，記述篇，東京大学出版会，２６６－２６７ページ参照。

(31) 輪湖，前掲書，１５ページ参照。但し，輪湖は「準二世」の定義を明確していない。「いわゆる準二世」といっているだけである。ここでは，渡伯時に１０才未満の日本生まれのものと考えておく。

(32) ブラジル日系人実態調査委員会（編），前掲書，記述篇，３０ページ第

3表参照。

(33) ブラジル日系人実態調査委員会（編），前掲書，記述篇，３２ページ第２図参照。

(34) あるいは，幼児期経験のひとつとして記憶の中に置き去されていくといえる。ある二世女性で，ブラジルの社会のある分野の専門家として活躍している人でもある人が，自分の子供をあやす幼児語は日本語を使い，日本の童謡を口ずさんでいるのを目撃したことがある。二カ国語併用する子供に育てるつもりで意識的にとられた育児法なのであったかどうかはわからぬが，場と言語が結びついていることのひとつの例であろう。

(35) この考え方には多くの反対意見が考えられる。例えば，年代と居住地による差があって，以上のような二世の一般化は不可能ともいえるし，又，ポルトガル語を話せない二世も存在するという反証をあげることもできよう。しかし，これらの反証は，二世をひとつの分析対象として論ずる時に問題とされねばならないことである。本稿では，移住者一世とは異る文化を持つ人ということで「ブラジル人」として考えている。

(36) 香山六郎（編），『移住４０年史』，サンパウロ，個人出版，１９４９年，３１６ページ参照。

(37) 三田，前掲書，９及び１９ページ参照。

(38) 輪湖，前掲書，２０ページ参照。

(39) Merton, op.cit., p.140.

マートンは，適応行動として，５つの類型を示している。５番目は「同調」である。文化目標も制度的手段も承認する行動様式である。従って逸脱行動ではないので除いた。

(40) Willems, e Saito, op.cit., pp.151f.

(41) Izumi, op.cit., p.365.

表1　臣道連盟会員分布

地域及びムニシピオ名	%	会員数（人）
パウリスタ鉄道延長線地域	38. 4	44, 350
Lucélia	4. 8	5, 500
Califórnia	0. 7	850
Bastos	3. 0	3, 500
Tupã	7. 1	8, 200
Pompéia	8. 7	10, 000
Marília	10. 4	12, 000
Vera Cruz	1. 0	1, 100
Gália	1. 4	1, 700
Garça	1. 3	1, 500
ノロエステ鉄道線地域	34. 2	39, 500
Baurú	0. 4	500
Pirajui	0. 4	500
Guarantã	0. 4	500
Cafelândia	3. 0	3, 500
Lins	3. 0	3, 500
Guaraçai	0. 7	800
Promissão	3. 0	3, 500
Penápolis	2. 3	2, 500
Birigui	3. 9	4, 500
Araçatuba	2. 6	3, 000
Guararapes	2. 3	2, 500
Valparáiso	4. 3	5, 000
Lavinia	1. 3	1, 500
Mirandópolis	4. 9	5, 700
Guaiçara	0. 9	1, 000
Andradina	0. 4	500
Alfredo Castilho	0. 4	500
Paraná 州	8. 7	10, 000
Outras	18. 7	21, 580
Total	100	115, 430

出　典：Miranda, M. B. de, Shindo Remmei — Terrorismo e Extorsão, São Paulo : Edição Saraiva, 1948, pp.64f.より作表

表２　年代別主要農産物の分布

（％）

年	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
1932	59. 0	14. 0	8. 3	3. 7	13. 0	0. 7	0. 4	0. 9
1937	32. 1	39. 0	6. 0	6. 3	14. 5	1. 0	0. 4	0. 7
1942	24. 3	39. 3	4. 5	8. 9	10. 9	1. 5	0. 7	0. 9
1947	23. 6	31. 2	3. 8	9. 8	27. 5	1. 9	1. 0	1. 2

備考：(1) コーヒー
(2) 綿作
(3) 米
(4) 奥地型作物（コーヒー，綿，米をのぞく―はっか，ラミー，こしょう，とうもろこし等）
(5) 近郊型作物（青野菜，トマト，じゃがいも，果物，バナナ，養鶏，乳牛）
(6) 混合型複作（(4)，(5)の混合）
(7) 多角経営（コーヒー，茶，こしょう，果物と肉牛，乳牛または養鶏の組合せ）
(8) その他

出典：　ブラジル日系人実態調査委員会(編)，『ブラジルの日本移民』記述篇，東京大学出版会，１９６４年，２９２ページ。

表３　農業上の地位別年代別変遷（綿作）

年	自作農(地主)	借　地　農	分　益　農	colonos
1932	32. 4（％）	55. 4（％）	5. 5（％）	6. 4（％）
1937	29. 1	52. 0	13. 1	5. 8
1942	35. 8	51. 0	9. 8	3. 4
1947	40. 4	49. 4	7. 5	2. 7

出典：　ブラジル日系人実態調査委員会(編)，『ブラジルの日本移民』記述篇，東京大学出版会，１９６４年，２９７ページ。

表5　パウリスタ延長線及びノロエステ線地域の経済状況 (1)

A：Marília　B：Mirandopólis　C：Lins　D：Baurú

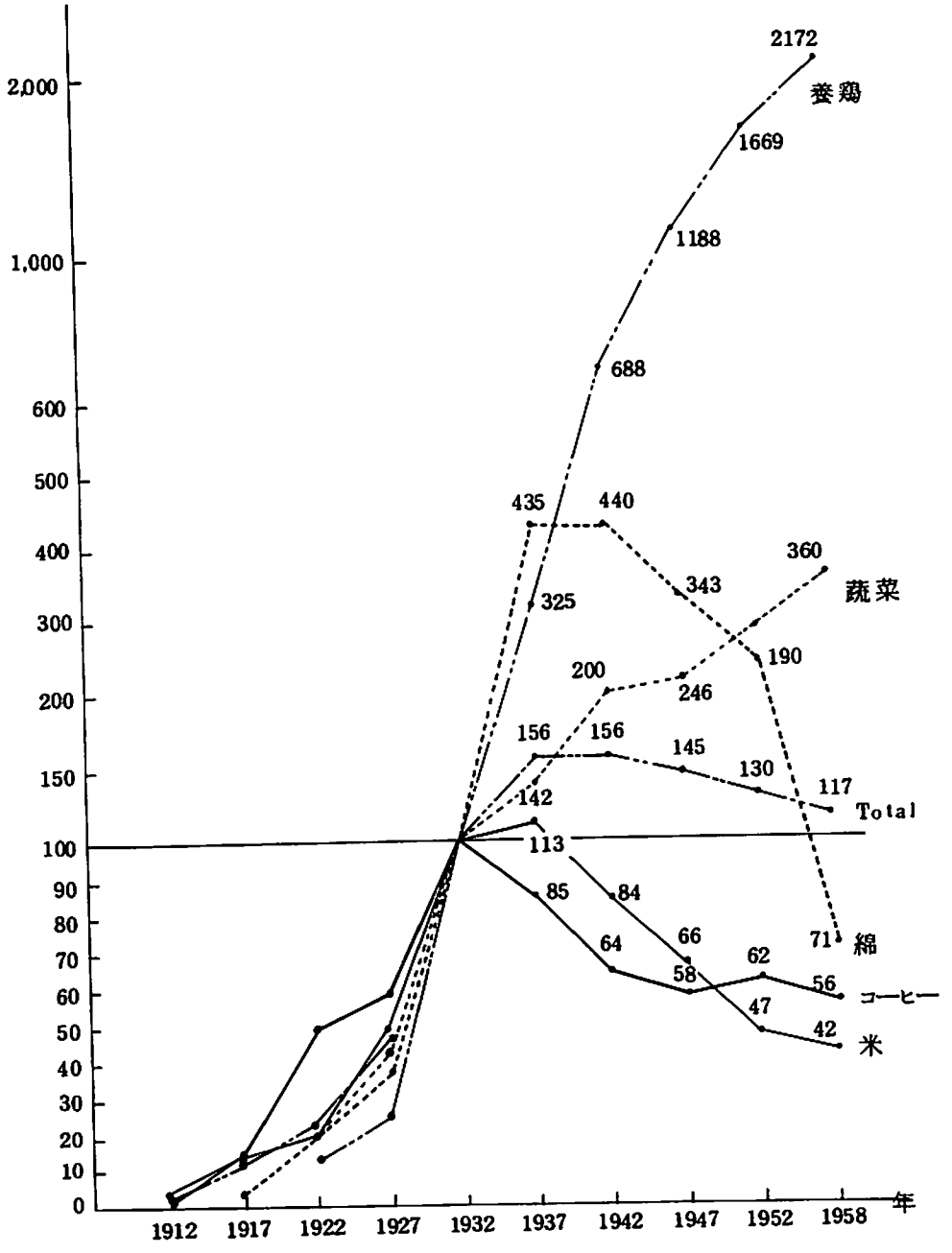
地名			パウリスタ延長線	A	ノロエステ線	B	C	D
家族数		実数	3,912	2,059	7,336	638	1,292	575
		%	100	100	100	100	100	100
職業及び農業上の地位	自作農	実数	1,457	749	3,901	411	694	95
		%	37.2	36.4	53.2	64.4	53.7	16.5
	コロノ又は借地農	実数	2,029	968	2,646	153	524	370
		%	51.9	47.0	36.0	24.0	40.6	64.4
	その他	実数	426	342	789	74	74	110
		%	10.9	16.6	10.8	11.6	5.7	19.1
収入（単位＝コント）	コヒー	実数	4,248	1,915	25,834	1,441	9,421	707 (1)•
		%	9.7	8.7	37.7	46.3	56.5	9.8
	綿	実数	34,490	19,273	28,784	779	2,887	6,538 (2)
		%	79.0	87.3	42.0	25.0	17.3	90.9
	総収入	実数	43,648	22,072	68,568	3,109	16,665	7,191 (3)
		%	100	100	100	100	100	100

•(1)+(2)が(3)を上回っているのは，基礎資料（輪湖俊午郎，『パウルー管内の邦人』，ティエチ移住地（サンパウロ）個人出版，１９３９年，２１～２２ページ）に総収入の算出方法が明らかにされていないので，筆者が推定により，(1)(2)の収入額を算出したためである（注２５参照のこと）。

表6　パウリスタ延長線及びノロエステ線地域の経済状況 (2)

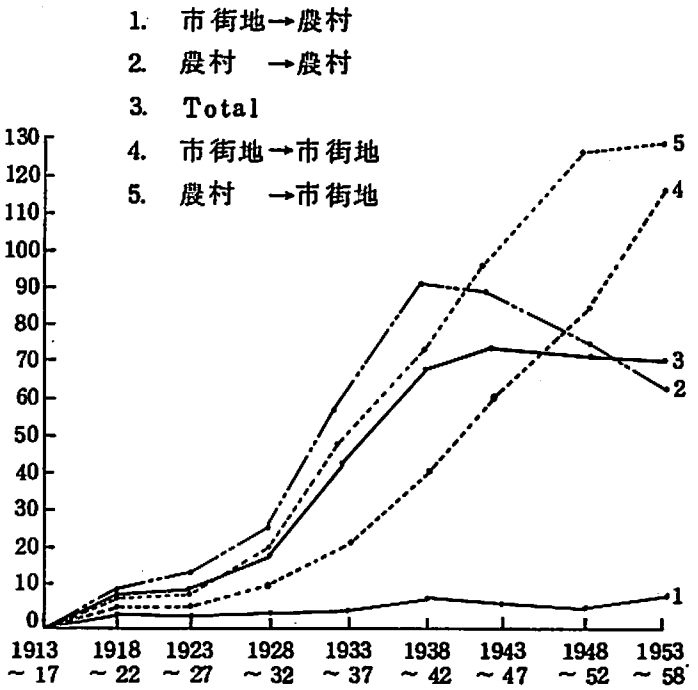
地名		パウリスタ延長線	A	ノロエステ線	B	C	D
家族数		100 %	52.6 %	100 %	8.6 %	17.6 %	7.8 %
職業及び農業上の地位	自作農	100	51.6	100	10.5	17.8	2.4
	借地農又はコロノ	100	47.7	100	5.8	19.8	14.0
	その他	100	80.3	100	9.3	9.4	13.9
収入	コーヒー	100	45.0	100	5.6	36.5	2.7
	綿	100	55.9	100	2.7	10.0	22.7
	総収入	100	50.6	100	4.5	38.1	16.4

図1　主要農産物の増加指数　（1932＝100）



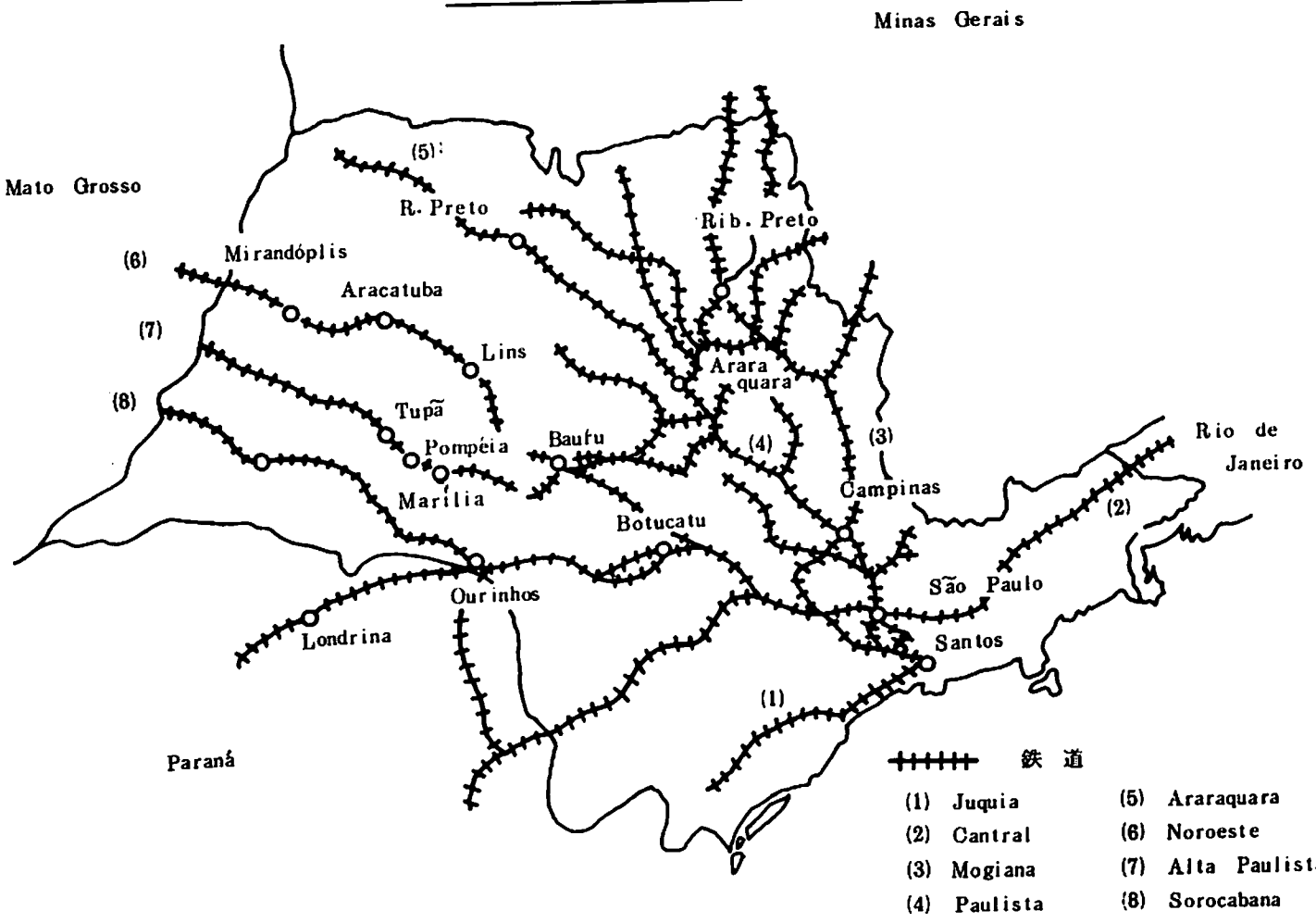
出典：　ブラジル日系人実態調査委員会（編），『ブラジルの日本移民』記述篇，東京大学出版会，１９６４年，２９３ページ。

図Ⅱ　市街地・農村間の移動指数の推移



出典：　ブラジル日系人実態調査委員会（編），『ブラジルの日本移民』記述篇，東京大学出版会，１９６４年，２７４ページ。

サンパウロ州略図



付図 1

付録2

臣道連盟綱領

〈一、我等ハ大日本帝国臣民ナリ。

我等在伯同胞ハ帝国臣民トシテノ矜(ほこり)ヲ堅持シ、日本精神ノ涵養(かんよう)ニ力(つと)ムベシ。而シテコレガ実現ノ道ハ祖先ヨリ継承セル左ノ美徳ヲ発揮スルヲ要ス。則チ徳義ヲ重ンジ、勤勉努力、隠忍自重シ、以テ義勇奉公ノ実ヲ挙グルニアリ。

一、我等ハ大東亜建設ノ翼賛ヲ期ス。

我等在伯同胞トシテ帝国ノ大東亜建設ヲ翼賛スルノ道ハ、先ヅコレニ即応スル教育ヲ実行セザルベカラズ。

則チ敬神崇祖ノ念ヲ高揚シ、身体ヲ錬磨シ、我等子弟ヲシテ皇国民トシテ錬成センガタメ日本語教育ニ努力シ、特ニ成人ノ精神教育ニ力ムベシ。　昭和二十年七月二十二日〉

出典：　高木俊明，『狂信』，朝日新聞社
１９７０年，２２２～２２３ページ。

在伯同胞指導方針要綱

Os princípios para a orientacão dos japoneses no Brasil

1. Difusão e aperfeicoamento do Espírito Japonês.

a) Culto aos Deuses e Antepassados (Shintoísmo). Para isso devem celebrar cerimônias, praticar o culto na vida cotidiana e em caso de festas coletivas fazer uma reverência profunda para o oriente. (Isto é, em direção ao Pálacio Imperial).

b) Ensino de língua japonêsa.

c) Prática de budo, i.e. jiu-jitzu, esgrima, jiu-ken-jitu, exercício com o arco, sumo, etc.

d) Cursos populares: Espírito de tonari-gumi ou seja, sistema de orientação celular dos vizinhos, adotados no japão.

2. Adocão da Nova Ordenm do Japão (Organizacão).

a) Secretaria, Contabilidade, Investigacões, Documentacão, Informações (principalmente sôbre prejuízos sofridos durante a guerra).

b) Ação: portar-se, com prudência, segundos as ordens da sede.

c) Comunicação: em português ou japonês.

d) Propaganda: jornais, folhetos, confererências e debates.

e) Direção: cinema, música etc.

fonte: Willems, Emilio e Hiroshi Saito, "Shindo-Renmei: Um Problema de Aculturação," Sociologia, Vol. IX, no.2 (1947), p.144.

（注　すべて原文のまま）